

中国のほんの話(88)

## 才気あふれる若手女性作家・笛安

蔭山達弥



夕方、母が私を迎え学校から家に帰ったとき、家の扉が意外にも開けばなしになっていて、私たちが客間に入ると、絹嬢の部屋の扉も半分開いていて、私が立つ角度からちょうど壁のあのニューヨーク（写真）が見える。まだ父と絹嬢はいる。絹嬢の顔は父の肩の上に埋まり、父の腕はしっかりとちょっと乱暴に絹嬢の腰をつかんでいる。母は後ろから私の口を押さえた。母の手にはまだ戸外の寒さが残っている。母は私の耳元で言った。「ベイベー、父さんと絹嬢は外国に行ったことがあるの。これは西洋の礼儀の一種なのよ。」母の声には一種の不思議な清らかさがあった。母は長い間、私をベイベーと呼んだことはなかった。(以上拙訳)

これは中国の雑誌『収獲』2003年第6期に発表された笛安のデビュー作《姐姐的丛林》の一節である。笛安は1983年、山西省太原の作家の家庭に生まれた。父李锐、母蒋韵はともに作家である。小さい頃、笛安はずっと母方の祖父母と病院の家族住宅に住んでいた。祖父は病院設立に功績があった人で、両親は毎晩この家に夕食を食べに来るだけ、笛安の宿題を検査して帰って行った。笛安は地元山西大学で歴史を専攻、2002年にパリソルボンヌ大に留学、社会学を専攻、記者から社会学を学んだことが自身の創作に影響を与えたのかと問われると、「社会学を学んで、物事を観察する角度が少し変わった。ただ、どう変わったかは上手く言えない。…先生方が一種のとても貴重な考え方、つまり“物事は証拠を重んじなければならない。一切の事実はあなたの最初の見方に奉仕させてはならない。”ということを提供してくれたことにとっても感謝する。」と答えている。(『中華読書報』2019年1月16日p11)

笛安が住んでいたフランスの小さな町の学生アパートのそばには橋があって、橋の下は自動車道。ある夜、笛安は橋の上に立って、橋の下を行き来する車の振動を体感しながら、遠方にマクドナルドの黄色いMの字が灯ったのを見つけ、こんな見知らぬ所に私がよく知っているマークがある。笛安にとって、その一瞬のMの字はお月さまのよう、だから笛安はグローバル化が良いことだとずっと思っている。

笛安は高速道路が大好きだ。デビュー作から時を経て15年、新作《景恒街》は、空港に向かう高速道路をドライブ中、偶然ラジオからある歌が流れたのがきっかけ。突然、脳裏にある場面が現れた。それは“ちょっと人生を体験した後の気持ち、お互い何も言うことはない。”笛安は書きたいストーリーに気付いたのである。

スマートフォンの地図Appを開き、‘景恒街’と入力すると、立ち所にこの街の通りの位置、建外SOHOと中国国際貿易センターの間、長安街の東区間に隣接し、北京CBD（商務中心区）、地価が特に高い所をはっきり示してくれる。《景恒街》はインターネット、ニューメディアの急速な発展を背景に、ファン経済（自分の好きなタレントへの愛を示すため、惜しみなく課金する消費者行為により生まれる経済効果）、アプリケーション開発、愛情と人間味、成功と失敗が複雑に入り混じり、からみ合い、引きちぎられたストーリーだ。この北京CBD（商務中心区）という職場のありのままの生活の姿と関係のあるストーリーの中で、その中にある大量の常識的な情報、スリル変化に富んだ話の筋の組み立ては彼女の過去の作品と比べて挑戦的である。

笛安は‘匠人’（職人、匠）という言葉が気に入っている。中国の小説家には文人がいて、文章や小説を書くことは二の次である。彼女はそうではない。小説家は第一に職人である。笛安は言う。「小説の技術が十分足りてこそ、ある程度の創作の自由を獲得することができるのだ。中国語に‘鬼斧神工’（建築や彫塑などの芸術的技法が高度で精巧であって、人力の及ばないようなさま）という大変良い言葉があり、まさにそのことを言っているのだ。」

かげやま たつや（非常勤講師・中国文学）